

PHAYAO レポート 2017-01 (新潟県 坪谷純希)

PHAYAO レポート番外編

新潟県加茂市 坪谷純希

新潟に住む28歳です。今回のレポートは、学生さんや会員さんのスタディツアーの感想でも、現地の活動支援のための技術者の状況報告でもなく、山口から遠く離れた新潟に住む私のようなものが書くレポートなので、タイトルを「番外編」とさせて頂きました。1月から2月にかけて、約20日間タイに滞在し、そのうち約半分の期間で、シャンティ山口の活動現場を見学させて頂きました。

自己紹介

タイでの現場についてお話しする前に、少し私自身の話をさせてください。

シャンティ山口とは約8年前、私が20歳の頃、山口県立大学に在学していた時に会いました。

スタディツアーに参加し、初めて見る外国の生活、そこに住む人たちの暮らしをよくする手助けを行う国際協力という取り組み。そういうものに憧れを抱いて、仕事として国際協力を行う道を選びました。大学卒業後は、農村開発系の NGO で働いたり、青年海外協力隊としてペルーで野菜作りに関する活動したりと、いつか自分自身で NGO を作り上げて、運営していく日を夢見て、一步一步歩んできました。

しかしその間で、途上国の農村で、お金や物はなくても、家族や地域の人など、何よりも身近な人を大切に生き方に出会い、単純に素敵だと思うようになりました。だからこそ、「家族や地域に住む身近な人を、何よりも大切にすること」を、これからの人生の軸に据えるため、地元で働き直すことにしました。

そのため、仕事として国際協力を行うことは、終わりにする決断をし、今までの自分の人生にけじめをつける意味で、もう一度、自分が国際協力をきっかけを持つようになった場所を訪れたいと思い、今回シャンティ山口に、活動見学やホームステイをお願いしました。

モン族の村滞在記

今回の滞在で1番楽しかったのは、モン族の村でのホームステイをした際に、ホストファミリーと一緒に農作業をさせて頂いたことでした。私自身 NGO で勤めていた時から農業に関わっていたので、日本と違う農業の形にもともと興味があり、現地の道具とやり方でとうもろこしを収穫する作業は、新鮮で沢山学ぶことができました。一方で、日本での農業の経験があるからこそ、毎日暑い中、斜度45度以上の山岳地帯でもサンダルで作業することの大変さや、1キロ15円にしかならない飼料用遺伝子組み換えトウモロコシの、農業や肥料代を差し引いた利益の低さや不安定さに、改めて気づくことができました。



とうもろこしの収穫体験



皮や芯を取り除いて 1 キロ 15 円程



動物の骨製のとうもろこし収穫用具



餅つきでのもてなし

そのような経済的に厳しい状況だからこそ、今現地の若い男の人たちはイスラエルや韓国に出稼ぎに出る人が多いそうです。実際、ホームステイした村でも、出稼ぎから帰ってきた人たちが、そのお金で新しく家を建てているところを何件も目にしました。イスラエルでは、基本的に3年~5年ほど単身で住み、その間はもちろん国に帰ることなどできない。電気のない村の人たちは、もともと電話など持っていないので、その間は奥さんや子供など、大切な家族と話すことさえできない。それが、どれだけつらいことか、どれほどしんどいことか、想像するだけで、怖い。更に中には、イスラエルでの猛暑の中の重労働により、出稼ぎ中に亡くなってしまっている人もいます。

モン族への差別

もともとラオス内戦から逃れてきたモン族の抱える問題は、そのような経済的不利だけではありません。そのひとつが、「差別」。例えば、モン族の人が県境をまたぐ長距離バスに乗ったとします。県境で警察がバスを止め、確認するのはIDカード。表記名が民族の名前であれば、公衆の面前でも荷物をすべて開けられ、怪しいものを所持していないかチェックされ、薬物反応を見るため検尿を強要させられることもある。ひと昔前にはもっとひどくモン族だから麻薬に関わっているという疑いだけで警官に父親を殺された寮生もいるそう。インドシナ戦争に翻弄されたハンディーを改善されつつも、まだまだ理不

尽な状況下にあるモン族の人達。様々な思いや怒りを抱えていて当然。

それでも、僕の知っているモン族の村の人からは、そんな暗い影は全く感じられない。いつも笑顔で底抜けに優しい。シャンティ山口のモン族スタッフは、同年代の会社で働いているモン族に比べて、給与は半分程度。それでもシャンティ山口で働く理由は、山岳地帯での暮らしを少しでも良くする手助けがしたいという気持ちがあるから。

そんな人たちのことを話で聞くだけだったら、そういう話もあるのかと、それだけで終わるのかもしれない。でも、現地で出会って、優しくしてもらって、友達になってしまったら、情くらい移ってしまう。自分に何かできないかと考えて当然。仕事としての国際協力からは離れるけれど、人間から離れるつもりはない。だから、とりあえずは会員として、これからも新潟からシャンティ山口の活動を応援していきたい。そして、またいつか縁があれば、何か違う形でも役に立てたらいいなと思っています。

最後に

今回シャンティ山口の事務局長、佐伯さんとタイの現地事務所まで過ごし、またひとつ学びがありました。夕方一緒に散歩に行った時、佐伯さんは必ず出会った人に挨拶をされています。たとえ挨拶が返って来なくとも。散歩のルートはできるだけ人に出会う道を選ぶ。タイにいるときでも、日本にいるときでも、それは一緒だそうです。そういう毎日の小さな積み重ねが、出会いを呼び込み、助けを必要としている人を見つけ、助けてくれる人を増やしていく。「小さくても強い NGO」を作り上げている。そんな佐伯さんの姿を見て、私も地元で挨拶をすることから、第2の人生のスタートを切ろうと思いました。例え、最初は変な顔で見られても、その先の輝く未来を見据えて。

佐伯事務局長をはじめとするシャンティ山口の皆様、今回は快く受け入れて頂き、どうも有り難う御座いました。



ホイブム村のホームステイ先のホストファミリーとの1枚

— 坪谷純希 —

2017. 2. 16. saeki